



第 133 号

—平成29年12月20日発行—

公益財団法人 古代学協会だより

『角田文衛の古代学』刊行開始



公益財団法人古代学協会の創設者であり、永年にわたる指導者であった角田文衛博士は、その九十五年の生涯の中でおびただしい学問的業績を残し、「古代学」という学問体系を確立し

れた『角田文衛著作集』(京都、法藏館)全七巻に収められていく。しかし、こうした多数の書物ですら、博士の業績の全てを取録するにはまだ不足である。そこで当協会は、博士の

博士の業績を顧みる限り、私たちはその範囲の広大無辺さに驚愕せざるをえない。こうした角田博士の膨大な業績は、博士が生前にまとめられた六十冊近い著書にまとめられており、また日本の古代史関係の諸論文は、昭和五十九年から六十一年にかけて刊行さ

れました。この資料をも集め、博士と「理想の研究機関」の構想についての資料をも集めました。本書を紐解いていただき、角田博士という稀代の歴史学者の歩みを追体験していただきたいと思う。

(山田邦和)

同志社女子大学教授

『角田文衛の古代学』4 「角田文衛自叙伝」
責任編集 山田邦和、吉川真司(京都大学教授)、A5判、四〇六頁、本体価格5千円、

販売 吉川弘文館

彰事業の一環として、新しい博士の「著作集」を編纂することにしたのである。

このシリーズは、本年十月から二年計画で全四巻を刊行していく予定であるが、このたび、

その初回配本として第四巻『角田文衛自叙伝』を完成することができた。晩年の角田博士が執筆されながらこれまで公表されていなかつた「自叙伝」「年譜」を主としつつ、博士の早熟さを示す若き日の「初期論文」を加え、さらには古代学協会、平安博物館、勧学院大学といつた、博士が生涯にわたって追究してきた「理想の研究機関」の構想についての資料をも集めました。

本書を紐解いていただき、角田博士という稀代の歴史学者の歩みを追体験していただきたいと思う。



第2図 2015年 金冠塚埋葬主部の再発掘完了後の写真。積石下の柱穴に注意。(慶州博物館 報道資料写真)

架構されていたことがわかつたのである（第2図）。

このような木材による架構物はすでに天馬塚や皇南大塚でも知られており、木榔を積石の荷重から護る構造物と考えられてきた。これに対しで金冠塚の木材構造物は、あらかじめ、中央に木榔を収容する空間（東西七二・m、南北六・二m）を残して四周に架構され、その中に石が積まれた。積石の外側面はおそらく段状で埋葬儀礼の祭壇の機能をしたものと推測される。木材構造物の上面のレベル（高さ四・七m）で、いつたん積石を止め、頂部を平坦にする。中央の空間に設けられた木榔は、從来考えられていた一榔一棺でなく、外榔（東西六・四m、南北四・二m）と内榔（五・三mと二・三五m）の二重榔であり、内部に長さ二・五一m、幅一mの木棺（周囲に祭壇状の石

で、積石や封土をたんに木槧を保護する外部設備としてだけ理解してきた積石木槧墳に関する理解を一変させる重要な発見である。

一九二一年の私掘でとりこぼされた遺物が木槧とその周辺から攪乱状態で出土した。その中には四点の金製耳飾り、刀装具、紺色ガラス杯の耳の破片など興味深い遺物がある。なかでも発掘者を驚かせたのは、「尔斯智王」という刻銘のある銀製刀装具が再び出土したことである。この金具は材質とサイズからすでに一九二一年に出土していた別の三累環頭大刀の鞘尻金具に相当すると推定された（第1図左下）。また、別にやはり既出土の三累環頭大刀の鞘尻にも「尔」の刻銘があることが判

大刀刻銘の「尔斯智王」が金冠塚の主の名前にまちがいないとしても、彼が新羅王（麻立干）であるとは即断できない。麻立干とは別に「葛文王」なる称号の王族が存在したことは從来から知られていたし、また同時代の新羅金石文には「王」の称号をも複数の有力者が同時に存在したことが確認されている。金冠塚の墳丘サイズは、慶州の古墳としては最大クラスではなく、皇南大塚やすぐ近くにある鳳凰台や西鳳凰台に比較するとやや小さく、從来考えられたような古新羅王陵そのものではなく、麻立干に次ぐ、王族かきわめて高位

の貴族の墓と考えられるのか至当である。武器武具の副葬からして彼が武人的性格の男性であったたらしく、おそらく新羅六部の沙喙部か喙部の干岐クラスの人物であろう、というのが尹相惠氏の結論である。ただし、この結論に対し、一九二一年の発掘当事者の証言によれば、金冠の上方から出土したのは二対の太環式耳飾りであつたといわれることを根拠に、これまで発掘されたあまたの新羅古墳で太環式耳飾りをつけた埋葬はすべて女性の墓と考えられ、金冠塚もその例外ではありえないから、被葬者は巫女的な女性であると主張する研究者もいるといわれる。

金冠塚の再調査に平行して、一九二六年に小泉顯夫氏によって発掘された慶州瑞鳳塚と、英國の東洋美術愛好家P・デヴィット氏の資金援助で発掘された同南墳(デヴィット塚)の再発掘と出土資料調査が行われつたり、数年以内にその報告書が刊行されるであろう。

なお、韓國文献の日訳には小谷地肇氏を勞わした。謝意を表したい。

羅の文化を示す遺物として一躍世界的に有名になつた。

しかし、この古墳は調査に当たつた浜田耕作・梅原末治師弟の現地到着を待たずしに、しごれをきらした地元人士によつて発掘されたため、古墳の内部構造や副葬品の配置状態が正確に記録されず、また出土状態の写真も撮影されなかつた。浜田・梅原は遺物を出した古墳の徹底的発掘は行わらず、発掘者からの聞き取りによつて主体部の内部構造と主要な遺物の配置状態を推定するにとどまり膨大な出土遺物の整理に忙殺された梅原は金冠塚の出土遺物はきちんと整理し、細かい金属片にいたるまで、丁寧に実測したが、正式報告書『慶州金冠塚と其遺宝』（一九二四一）は図版（上）（下）と本文（上）



第1図 金冠塚大刀の「尔斯智王」刻銘。(上)(右下)1921年出土の銀装親子三累環頭大刀とその鞘尾金具上の刻銘。(左下)2015年再発掘で新たに出土した王名つきの銀鞘尾全員(国立鹿児島県立博物館・報道資料写真)

梅原が急に歐米留学することになつたからだといわれる。浜田はこの欠を補うため、慶州古蹟研究会から一般読者のために『慶州の金冠塚』（一九三二）を出したが、金冠塚の武器や馬具や土器など遺物の多くに関する記述は簡略なものに終わつている。

穴澤咏光

慶州金冠塚の再発掘調査

は刊行されたが、本文（下）
二〇一四年、慶州金冠塚の出土遺
物であり、慶州金冠塚もその最優先
テーマに取り上げられた。

であり、慶州金冠塚もその最優先テーマに取り上げられた。二〇一四年、慶州金冠塚の出土遺物の再整理が行われ、銀装親子三累環頭大刀の鋒落としを行つたところ鞘金具から、梅原が気づかなかつた「余斯智王（イサジワーン）」「八」「十」の刻銘が発見され、学界に大きな驚きをもたらした（「余」は「爾」の略字体であるという説がある）。（第1図上・右下）このような王の名は『三国史記』『三国遺事』などの史書にも、同時代の金石文にも全く見あたらず、これが金冠塚被葬者の名前かどうかに関して議論が起つた。

金冠塚の墳丘は遺物発見当時すでに崩壊しており、現在、墳丘西側の一部を残すだけであったが、積石の一端と埋葬主体構造の基底部が良好に残存しており、一九二一年の私掘でとりこぼされた副葬品の残りが一五〇〇点ほど回収された。

の貴族の墓と考えられるのか至当である。武器武具の副葬からして彼が武人的性格の男性であったたらしく、おそらく新羅六部の沙喙部か喙部の干岐クラスの人物であろう、というのが尹相惠氏の結論である。ただし、この結論に対し、一九二一年の発掘当事者の証言によれば、金冠の上方から出土したのは二対の太環式耳飾りであつたといわれることを根拠に、これまで発掘されたあまたの新羅古墳で太環式耳飾りをつけた埋葬はすべて女性の墓と考えられ、金冠塚もその例外ではありえないから、被葬者は巫女的な女性であると主張する研究者もいるといわれる。

金冠塚の再調査に平行して、一九二六年に小泉顯夫氏によって発掘された慶州瑞鳳塚と、英國の東洋美術愛好家P・デヴィット氏の資金援助で発掘された同南墳(デヴィット塚)の再発掘と出土資料調査が行われつたり、数年以内にその報告書が刊行されるであろう。

なお、韓國文献の日訳には小谷地肇氏を勞わした。謝意を表したい。



A portrait of a man with dark hair and a slight smile, wearing a light-colored button-down shirt. He is positioned next to a vertical column of Japanese text.

もつたらない」と私は思う。建築様式の問題、都市景観の問題、あるいは経済史的な視点など、近世瓦の研究が明らかにしうる課題は多いはずである。当時の建築物の多くが失われた現在において、条件が整えば廃棄年代を知ることのできる発掘調査資料は、大きな可能性を秘めている。しかしながら、近世瓦に関する考古学的な研究は、山崎信二氏による優れた包括的研究があるものの、必ずしも活況を呈してはいない。近世瓦は、日本史の一端を明らかにする歴史資料として、その価値が正に評価されなければならない。

ただ正直に告白すると、私もついた。
最近まで近世瓦には冷淡な態度をとっていて、発掘現場においても、最低限の情報を取得する以上の努力を払ってこなかつた。そんな考えを改めるきっかけになつた資料について、以下に紹介したい。

近世瓦研究の意義と楽しさ

—特別史跡大坂城跡出土資料から—

大阪府教育庁 市川 創



図1 特別史跡大坂城跡出土の三葉葵文鬼瓦（大阪文化財研究所提供）
徳川期大坂城の天守に葺かれた可能性がある。



図2 図1に示した三葉葵文鬼瓦の裏側（大阪文化財研究所提供）

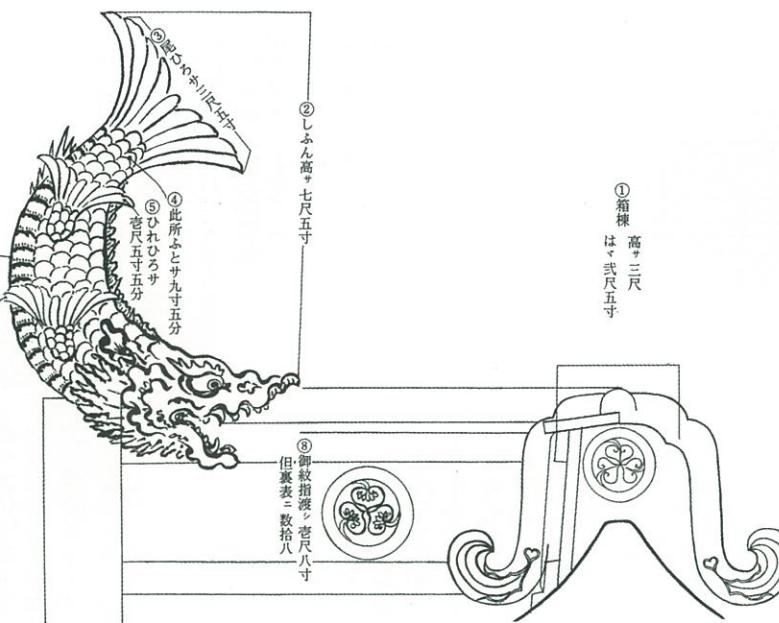


図3 德川期大坂城天守の箱棟および鰐図（註3文献より転載）

構造だろう。写真には示していないが、側面にも紋様が表現されている。興味を引くのは、手間ひまかけで作られたこの大型の鬼瓦が、いつ、どんな建物に葺かれていたのかということである。参考となる史料が、大阪市内の寺院に伝わっている（図3）。この史料は、万治三

(一六六〇)年に火薬庫の爆発で被害を受けた天守を修築するために作製されたものと考えられており、天守の大棟を描いたと考えられる図面を掲載した。

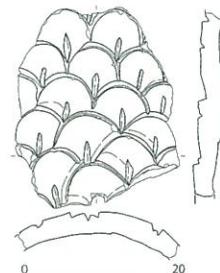


図4 特別史跡大坂城
跡出土の鰐瓦（註4文
献より転載）

さて、今回紹介した鬼瓦は、今年十月に大阪城本丸にオープンした商業施設「ミライザ大阪城」の展示室に陳列され、約三五〇年ぶりに再び大坂城で衆目に触れている。大阪城を訪れる際には、ぜひ足をお運びいただければ幸いである。

(客員研究員)

さて、今回紹介した鬼瓦は、今年十月に大阪城本丸にオープンした商業施設「ミライザ大阪城」の展示室に陳列され、約三五〇年ぶりに再び大坂城で衆目に触れている。大阪城を訪れる際には、ぜひ足をお運びいただければ幸いである。

(二〇) 一七年十一月現在。
(3) 内田九州男「徳川時代大坂城天守指図について」(『大阪城天守閣紀要』第二号、大阪、一九九二年)。

(4) 櫻田小百合「徳川期大坂城天守の鱗瓦?」(『葦火』一七六号、大阪、二〇一五年)。

出土した鬼瓦の直径は約四十cmであるから、

*
*
*

〔土車〕(つちくるま)とは
『六角堂縁起』によると、当協会の所在地である三条高倉辺一帯は、愛宕郡折田郷土車里と呼ばれていたという。平安京遷都以来この地名はなくなってしまつたが、本誌名はこの名をとつたものである。

古代文化第1号

一三

きつかけという程の出来事はありません。研究対象として、特に文献史料の古代を選択した理由は、古代の手法に惹かれたからですね。ごく限られた史料の中で、合理的な解釈を導くという手法です。

――研究者の道を進もうと思われたのは?

大学の学部を出たあと、一般就職しました。研究者なんて、なろうと思つてなれるものでもありませんから、歴史学の成果を消費するだけで満足できるなら、それでいいかと思つていました。しかし、本を読んでいても納得できない、自分の知り



1982年 京都府八幡市生
京都市在住
日本学術振興会特別研究員

第七回 角田文衛古代学奨励賞

受賞者インタビュー

が積み重なったこともあり、自分で歴史を明らかにする側に身を置きました。いとと思うようになりました。

し読んでいる本などはありますか？
恩師にあたる吉川真司先生、鎌田元一先生、富谷至先生の著作はよく読みます。研究が行き詰まつた時に、むしろ近世史の本を引っ張り出してくることも多いです。論の立て方で勉強になりますし、新しい発想を得られたりしますから。

「仕方がない」一歩車を立くなつたのですが、少なくとも私の経験で申し上げると、根拠を確認しておいた方が、結局、早く仕事を終えられるケースは多いです。また、根拠を知つていれば、何が本質的な問題か分かりますので、その本質を乱さない限りにおいて、自由に柔軟な対応がしやすくなります。

――息抜きにしていてること、最近気になつていてることは?

は虫類カブエに一度行きたいのですが、なかなか行く時間がありません(笑)。

――その他メツセージがございましたら、お願ひいたします。

考古と文献の架け橋として、貴会のますますのご発展をお祈りします。このたびはありがとうございました。

受賞対象になつた奈良時代の解由制度については専論がなく、その研究状況の突破口を見つけるべく、本庄先生は難解な法史史料を着実に解きほぐし新たな史実の発見に到達されました。

今後も、ご自身の目標に向かつてさらが常のはじけるような笑顔にもお見受けできます。

時あたかも燒いてく。かな炎暑の候であるが、この時にあたつて、かねがね我々の念願であつた月刊『古代文化』の刊行が実現されるに至つたことを、我々は深く欣びとするのである。

想えば、我々の古代学協会が設置されたのは、昭和二十六年十月のことであった。翌年一月に『古代学』の創刊号を学界に贈つて以来、協会はひたすら『古代学』の刊行に全力を傾注し、他の事業には一切手を出さないで過して來たのである。古代学界に有益な幾つかの事業も想い浮ばぬでもなかつたが、『古代学』の刊行自体が大きな負担であつたため協会としては他の事業を顧みる余裕がなかつたのである。

さいわい協会も、本年一月に財团法人となり、運営の面で多少余裕も出てきたのであるが、この際先ず着手した事業の一つが即ち本誌『古代文化』なのである。

雑誌『古代学』は、季刊であるが煩雑な印刷の都合でとかく発行が遅れがちであり、会員や会友との連絡

からしてそれは、容易に実現の運びに至らなかつた。

この度、本協会京都支部には、古代文化研究会が設立された。同研究会は、本協会の上記の事業を達成することを目的として結成されたもので、『古代文化』の編集、刊行を主目的とし、あわせて見学、講演会などの開催をもくろんでいるのである。別個の会を設けたのは、一には会計上の都合であり、一には同研究会の幹事や編集委員の創意を生かすためである。しかしそれが本協会と表裏一体のものであることは、お断りするまでもないのである。

わが国の古代学界には、すでに『貝塚』や『国立博物館ニュース』のような月報もみられているし、また古代史関係の雑誌も幾つか存している。我々の『古代文化』は、これらと提携し、協力することは大いに意図しているけれども、それらと対立したり、競争したりしようとする

結して云ふは『古代文化』は古
代学協会のサロンのようなものであ
る。

版で刻まれた一字一句には、創刊への熱い思いがみなぎっており、いま読み返しても胸が熱くなるような思いがします。

はじめは学術雑誌『古代学』を補うような役目、すなわち叢報としてスタートした『古代文化』ですが、『古代学』休刊後は、役割をバトンタッチされました。その重責に応えるため、奮闘していただきいた代々の編集委員の皆様、また支援を続けてくださった購読者の皆様にはこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

なお、この『土車』も平安博物館だよりとして昭和五十二年一月に創刊され、創刊四十年を迎えることができました。

重ねてこれまでの皆様方のご協力に感謝するとともに、より一層のご協力、ご支持をお願い申し上げます。

隨想十四

も滞りかせた。また「古代学」は、その性質上、新しい調査や

性質のものではない

卷之三

第七回 角田文衛古代学奨励賞

本庄総子「奈良時代の解由と交替訴訟」

(『古代文化』第六十八巻第一号、平成二十八年九月)

本庄氏はこの論文で、日本古代の律令国家における国司の交替手続を解由と呼びますが、従来の研究では奈良時代のそれは等閑視されてしましました。本研究はそこに着目し難解な法制史料を精密かつ着実に読み解き、その実態を見事に解明したすばらしい研究であり、高く評価されました。

授賞式は十月七日佛教大学四条センターにおいて執り行われ、その後受賞記念講演会「官僚が古代を映す

—奈良時代における国司交替からのヒント—

が開催された。

平成二十九年度

公開講演会

紀伝道の学問と試験

—菅原道真が学び、
教えた大学の学科—

第七回角田文衛古代学奨励賞授賞
記念講演に引き続き、古代学協会研究員古藤真平による公開講演会を開催いたしました。

講演では、日本古代律令国家の高等教育と官人養成を担った大学寮と、そこで学生が専攻した学科「紀伝道」の制度について、また紀伝道を学び、文章博士として教え、政治の世界でも右大臣にまで上り詰めた菅原道真についても、資料に基づいて詳細な説明がなされました。

かなり専門性の高い内容ではありましたが、ご参加の皆様も、メモを取りながら最後まで熱心にご聴講いただき、盛会裡に閉会いたしました。



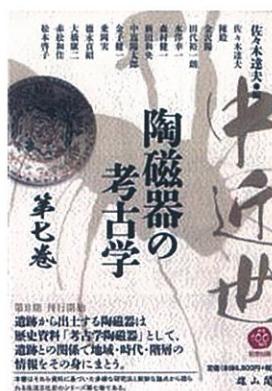
片手に歩いてみたくなる。
平成二十九年十月、新泉社、四六判並製、各二八八頁オールカラー、定価各二〇〇〇円+税

◆佐々木達夫編著『中近世陶磁器の考古学』第七巻

中近世における世界・日本各地の陶磁器研究の最新研究成果を網羅。日本・アジア・中近東・ヨーロッパ各地の遺跡から出土した陶磁器を歴史資料として用い、過去の人々の生活の一端を垣間見る。

平成二十九年十月、雄山閣、A5判上製、三三三二頁、定価六八〇〇円+税

出版だより



◆山田邦和著『京都 知られざる歴史探検』上・下	発行者 公益財團法人 古代学協会
一見してわかりやすい。古代の建	造物が遺っていない京都旧市街においてなるほどこれがあの遺跡なのかな
物が遺っていない京都旧市街においてなるほどこれがあの遺跡なのかな	いう発見多數。早速収載の地図を
電話○七五二一五二一三〇〇〇	604-8131 京都市中京区三条通高倉西入ル
発行日 平成二十九年十二月二十日	印 刷 明文舎印刷株式会社
電話○七五二一五二一三〇〇〇	601-8316 京都市南区吉祥院池ノ内町一〇